

令和3年度第2回川崎市総合教育会議 会議録

日 時 : 令和4年3月23日 水曜日 15時00分～16時30分

場 所 : 川崎市役所第3庁舎18階 講堂

出席者 :

福田 紀彦 市長
小田嶋 満 教育長
岡田 弘 教育長職務代理者
高橋 美里 委員
岩切 貴乃 委員
石井 孝 委員
田中 雅文 委員

理事者

○総務企画局

中川総務企画局長

○教育委員会事務局

石井教育次長

森総務部長

田中教育政策室長

大島学校教育部長

星野学校教育部担当部長

細見指導課長

南谷指導課担当課長

佐藤総合教育センター所長

宮嶋総合教育センターカリキュラムセンター室長

椎名総合教育センターカリキュラムセンター担当課長

添野総合教育センター情報・視聴覚センター担当課長

二瓶教育政策室担当課長

葛山教育政策室担当係長

事務局

宮崎総務企画局都市政策部長

山井総務企画局都市政策部企画調整課担当課長 [企画調整]

瀬川総務企画局都市政策部企画調整課担当課長 [企画調整]

長谷山総務企画局都市政策部企画調整課担当係長 [企画調整]

片山総務企画局都市政策部企画調整課担当係長 [企画調整]

末吉総務企画局都市政策部企画調整課職員 [企画調整]

傍聴者数 : 1人

報道関係 : 0社

※ 読みやすさ等のため、文意を損なわない範囲で、重複表現、言い回しなどを整理しています。

宮崎総務企画局都市政策部長 それでは、定刻になりましたので、令和3年度第2回川崎市総合教育会議を開会いたします。

初めに、福田市長から御挨拶をお願いいたします。

福田市長 改めまして、こんにちは。年度末のお忙しい中、御参加をいただきまして、誠にありがとうございます。

本日御確認いただくかわさき教育プランの第3期実施計画は、本市の今後の4年間の取組や目標を定めた川崎市総合計画の第3期実施計画と連動して策定を進めてまいりました。5年後、10年後の将来も見据えながら、変化の激しい社会をたくましく生き抜く力を育み、誰一人取り残さない持続可能な川崎の未来を切り開いていくために、市として何に取り組んでいるかをまとめております。

本日は、かわさき教育プラン第3期実施計画と次期教育大綱の取扱いを御確認いただき、併せて子どもたちの生きる力の一つとなる学力向上に向けた取組を議題として、意見交換を進めてまいりたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

宮崎総務企画局都市政策部長 ありがとうございます。総合教育会議は地方公共団体の長であります市長が招集・主宰することとなっておりますので、この後の進行につきましては、福田市長、よろしくお願いいたします。

福田市長 それでは、次第に従いまして協議・調整をお願いいたします。

本日は二つの議題について議論してまいりたいと思います。一つ目の議題はかわさき教育プラン第3期実施計画の策定及び次期教育大綱の扱いについてです。

前回の会議では、現在の大綱と同様に次期教育大綱についてもかわさき教育プランの実施計画をもって大綱としていく考え方について御確認をいただきました。本日は、かわさき教育プラン第3期実施計画が策定されましたので、改めてその内容を御確認いただいた上で、次期教育大綱とすることについて確認をしていただきたいと思います。

それでは、事務局から説明をお願いいたします。

二瓶教育政策室担当課長 それでは、かわさき教育プラン第3期実施計画及び川崎市教育大綱の取扱いにつきまして、御説明いたします。

改めまして、かわさき教育プランの位置づけや基本理念、基本目標を確認させていただきます。資料の3ページを御覧ください。

かわさき教育プランは、本市における「教育振興基本計画」であり、おおむね10年間の指針となるものでございます。学校教育と社会教育が対象分野としてございます。

4ページを御覧ください。基本理念は、夢や希望を抱いて生きがいのある人生を送るための礎を築く、基本目標は自主・自立、共生・協働でございます。

5ページを御覧ください。かわさき教育プランの構成は、先ほどの基本理念、基本目標の下におおむね4年の計画期間とする基本政策、施策、事務事業といった階層で構成しております。

6ページを御覧ください。このたび策定いたしました第3期実施計画は、10年の計画期間におきまして最後の4年間に当たります。

それでは、具体的に第3期実施計画について御説明いたします。

8 ページを御覧ください。第3期実施計画では、第2期実施計画の8つの基本政策を踏襲しながら、星印を付しております重点事業を設定させていただきました。

9 ページを御覧ください。8つの基本政策におきまして重点的に取り組む必要がある主な事業をピックアップして御説明いたします。

初めに、基本政策Ⅰでは、第2期から継続をいたしまして、キャリア在り方生き方教育を重点的に推進し、キャリア発達を促してまいります。キャリア在り方生き方教育の推進に当たりましては、現代的諸課題であるSDGs、かわさきパラムーブメント等の視点も引き続き取り入れながら、カリキュラム・マネジメントの充実が図られるよう、教職員研修などの支援を行ってまいります。

10 ページを御覧ください。基本政策Ⅱでは、学ぶ意欲を育て、「生きる力」を伸ばすため、川崎市学習状況調査の拡充により個人の成長を確認した上でのカリキュラム・マネジメントの改善・充実に取り組んでまいります。市学習状況調査につきましては、これまで本市の教員や総合教育センターが主体的に作問・分析をしておりましたが、今後は、民間ノウハウも活用しながら充実を図ってまいります。令和4年度にモデル実施を行いまして、令和5年度から全面実施を予定しております。この学習状況調査につきましては、後ほど資料2、学力向上に向けた取組におきまして、補足させていただきます。

11 ページを御覧ください。基本政策Ⅲにおけるもう一つの重点事業といたしまして、かわさきGIGAスクール構想の推進でございます。昨年4月からスタートいたしましたかわさきGIGAスクール構想でございますが、段階的なステップアップに取り組むとともに、国のデジタル教科書実証事業への参加や、各種副読本のデジタル化など、GIGA端末の活用を一層進めてまいります。また、学習履歴（スタディ・ログ）など教育データの整理と活用を行い、指導や評価の改善を行ってまいります。

12 ページを御覧ください。基本政策Ⅲ、特別支援教育の推進でございます。通級指導教室の巡回方式の導入や中央支援学校大戸分教室の増築、中央支援学校高等部分教室の整備などによりまして、支援教育の充実を図ってまいります。また、市域内の特別支援学校の狭あい化解消に向けまして、神奈川県と連携しながら、県立特別支援学校新設に向けた取組を推進してまいります。

13 ページを御覧ください。基本政策Ⅲのもう一つの重点事業でございますが、児童生徒支援・相談活動の拡充でございます。これまで要請に応じて派遣しておりました巡回カウンセラーにつきましては、定期巡回によるアウトリーチを行うため、7名配置から15名配置に拡充をいたしてまいります。また、スクール・ソーシャル・ワーカーにつきましても11名配置に拡充をし、巡回型と要請型の両方を実施できるよう体制を整えてまいります。

14 ページを御覧ください。基本政策Ⅳでは、学校施設長期保全計画を推進し、老朽化対策やバリアフリー化、また地域の避難所でもある学校施設の防災機能の強化を図ってまいります。

15 ページをごらんください。基本政策Ⅳのもう一つの重点事業が、児童生徒数・学級数増加対策でございます。大規模集合住宅の開発による児童生徒数の増加や、学級編制の標準の段階的な引下げによる学級数の増加に対応するため、教室の転用や増築などに取り組んでまいります。なお、令和7年4月には新川崎地区の新設小学校を開校する予定でございます。

次に、16 ページを御覧ください。基本政策Ⅴでは、教職員の働き方・仕事の進め方改革を推進してまいります。特に部活動指導員や教職員事務支援員の配置拡充を行い、教職員の負担を軽減し、本来的な業務に当たる時間を確保してまいります。また、学校運営協議会、コミュニティスクールにつきましては、順次拡充をし、令和7年度までに全校設置することで、学校・家庭・地域が一体となって学校運営に取り組む仕組みを整えてまいります。

17 ページを御覧ください。基本政策Ⅵでは、地域の寺子屋事業の推進でございます。これまでも地域の実情に合わせた開校を進め、多世代のつながり、学び合う生涯学習の場の定着を目指し、計画期間中に全校開校を目指してまいります。

18ページを御覧ください。基本政策Ⅶでは、学習や活動を通じた人づくり、つながりづくり、地域づくりを推進し、市民館ではさまざまな学びの機会を提供するとともに、図書館では自動車文庫、返却ボックス、図書館ネットワーク機能の強化などのさらなる利便性の向上に努めてまいります。

19ページを御覧ください。基本政策Ⅶのもう一つの重点事業、学校施設の有効活用につきましては、さらなる活用を目指した「K a w a s a k i 教室シェアリング」の推進や「みんなの校庭プロジェクト」に取り組んでまいります。令和4年度にモデル校での試行を行い、利用者拡大に向けた工夫や実施方法などの検討を行ってまいります。

20ページを御覧ください。基本政策Ⅷでは、橘樹官衙遺跡群の史跡整備の推進により、遺跡群の理解や愛着を深めることができるよう、史跡の適切な保存管理・整備・活用を推進してまいります。

教育プラン第3期実施計画の重点事業の概要を説明させていただきました。資料の1の説明は、以上でございますが、ここで改めまして教育大綱としての位置づけについて確認をさせていただければと存じます。

21ページを御覧ください。令和3年度第1回の総合教育会議におきまして、令和4年度以降の次期教育大綱につきましては、本市における教育振興基本計画である「かわさき教育プラン第3期実施計画」をもってこれに代えることについて、方向性を確認させていただきました。

資料1の説明は以上でございます。

福田市長 ありがとうございます。

内容が多岐にわたっておりますけれども、教育委員の皆様には策定段階から御尽力をいただきましたので、内容は熟知されているお話だと思いますけれども、策定を終えて、改めて今後の4年間の取組への期待などについて、皆様から御意見をいただきたいと思っています。どなたからでも結構です。

田中委員、お願いします。

田中委員 ありがとうございます。

私からは18ページの基本政策のⅦについて、意見を若干申し上げたいと思います。

この上のほうの星印で書かれた言葉によると、オンラインを利用しながら学びの場を充実するということですけれども、これだけをぱっと見ると、市民がお客さんになる。市民に向けての学習機会をどんどんオンラインを使って提供していくように見えてしまうが、市民館でオンラインの環境が整っていくということは、W i - F i 環境を含め、もっともっと市民が利用側から供給側に回れるチャンスが広がってくるのだと思います。

既にW i - F i 環境が整ったような施設では、市民がもう自分たちでコンピューターを持ち込んで、W i - F i 環境を利用しながらインターネットを利用してほかの地域の人とも交流しながら、自分たちの活動を広げているわけです。市民館がそういう拠点としてさらに活用されていくということが重要だと思っています。

そういう中で市民館同士が交流するとか、利用者同士が交流して、川崎市の全市民館のネットワークが市民ベースで出来上がって、そういう市民主体の総合的な学習プログラムもそこから生まれてくるとか、何か、市民が単なる利用者からもっともっと主体的な学びと、さらには地域づくりにつながるような、地域を変えるような学びをネットワークを通して展開していくという、そういう可能性をぜひこの基本政策Ⅶで追求していただけるとありがたいなと思います。

学校では、もうG I G A スクールでどんどん子どもたちが主体的な学びを始めていますので、やっぱり市民も負けていられませんので、ぜひ、市民は市民館を拠点にして、オンライン設備を使いながら主体的に学び、それを通して地域を変えるということを進めていけるといいなとつくづく感じました。この基本政策Ⅶをそういう形で展開していただけると良いと考えています。

以上です。

福田市長 ありがとうございます。

そのとおりですね。これからちょっと説明するときにも気をつけなくてはいけないと思いますが、受動的な学びということではなくて、主体的な学びというか、こちらから発信側にもなるというような、その拠点になり得るんだということを、何か、絵で描くときも受動的な表現にならないように気をつけなければならぬと思います。ありがとうございます。

石井委員、お願いします。

石井委員 ありがとうございます。

本年度は、教育委員として小学校の創立記念行事の参加や夜間中学の視察、それから各校の研究授業の参加、さらには橘高校の国際科の学生との面談や研究発表会等に、実際の教育現場を見させていただきました。本当にありがとうございました。また、生徒さんと話す機会にも恵まれて、大変よかったと思っています。

また、僕のこの川崎での勤務の経験も踏まえまして、今感じていることは、川崎の持つ地域の教育資源、こういったものをこの基本政策、それぞれに生かしてほしいなと思います。

川崎市には、児童生徒を育み、それから育てる風土が伝統的に存在していますし、人や地域社会に大きな教育資源があると思います。地域の方が野菜、あるいは稲、ナシの栽培等を授業に提供したり、それから児童と一緒に菓子のブランドを開発したり、また伝統のお祭りや文化の継承等にも積極的に関わって、子どもたちのキャリアづくりとか、あるいは地元愛の醸成に大変大きく貢献されていることを目の当たりにしています。

加えて、川崎には日本を代表する国際企業や地域に根差した商店等が豊かなノウハウをたくさん持っています。さらに、多文化共生のまちとして国際色あふれる人材もたくさん抱えていますし、このような地域の教育資源を、ぜひこれから8つの基本政策に最大限活用して、この4年間の充実につなげていってほしいと思っています。

以上です。

福田市長 ありがとうございました。

石井委員おっしゃるとおり、私も今年度は周年行事が多かったので、皆様と一緒に参加させていただきましたけれども、実に各校地域の特性がその教育の現場に生かされていることを、私自身も大きく感じる事ができました。今後4年間でもそういったことを、さらに生かしてもらいたいなと私も思っています。ありがとうございます。

ほか、いかがでしょうか。

高橋委員、お願いします。

高橋委員 私は保護者委員なので、やはり子どもたちへの教育ということで、例えば一人ひとりの教育的ニーズへの対応について、非常に関心が高かったわけですが、私の息子も通級指導教室に通っておりまして、一つの区に一つの通級があるとはいえ、なかなか通うことが難しいという声は、ずっと長くあったので、それに対して巡回の指導を拡充していただいたりですとか、また、いろいろ、コロナでもそうでしたけれども、学校が抱えるいろいろな問題ですとか、あと子ども、先生の心の問題などもあるので、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーを順次きちんと拡充していることが、これまでの1期、2期の実施計画でも着実に進めていることが第3期につながっていると思って、非常にありがたく思っております。

引き続き、第3期でも現場の先生や、子どもたち、保護者の声、ニーズを聞いていただいて、着実に計画を進めていただけたらいいなと思っております。

福田市長 ありがとうございます。

高橋委員からも様々なアドバイスをいただいて感謝しています。3期のところで、通級指導教室に関しては巡回も含めてということで、特別支援教育の担当の先生たちもそうですけど、非常に意欲的にこういった課題について取り組んでいただいていること、私も非常に心強く感じておりますけど、まだまだ課題というのはたくさんあるので、さらに前に進めていけるように、市長部局としてもしっかり協力していきたいと思っています。ありがとうございます。

岩切委員、よろしくをお願いします。

岩切委員 本当に川崎の子どもたちを、今回、周年行事とか、あるいは研究会のビデオの中で拝見させていただいて、すごく元気で前向きな子どもが多いなということを感じています。

そして、今年、GIGA端末が導入されて、そのGIGA端末に慣れるのが、本当に期待以上に早かったことをすごく感銘を受けております。

その中で、今回、この誰一人取り残さないという話がありますが、ともすれば底上げで、本当に底上げのほうにどうしても目が行ってしまいますが、秀でている子をもっともっと伸ばすということもぜひやっていただきたいなと思っています。

この8つの基本政策のうちの2つ目の学ぶ意欲を育て、「生きる力」を伸ばすというところで、生きる力というのが学校で学んでいる時期だけではなくて、生涯学習という意味で、キャリアを積み重ねていくという観点からももっともっと川崎の特色である地元にいるいろいろな企業があるわけですから、その企業の先輩の方たちの話を聞く機会とか、そういったことをもっともっとうまく活用できるといいなと思いました。

具体的にどんなことを考えたかと申しますと、GIGAスクール構想の中でGIGA端末を使うとどんなところでもつながれるというすごいメリットがあるわけですから、オンラインでいろいろな現場を見たり、あるいはどんな働く人がいるのか、あるいはどんなことが可能性として自分の中にあるのかということも、今まで以上にいろいろな体験ができるかなと思います。仮想体験かもしれないけれども、そういう機会をどんどん増やして行って、子どもたちのそれこそ夢を、そして理想をどんどん広げていくということも、ぜひやっていただけたらうれしいなと思っています。

福田市長 ありがとうございます。

これは、教育委員会だけではなくて、経済労働局が主催しているものととか、臨海部国際戦略本部が主催しているもの、こういった企業さんとのつながりで、子どもたちに対するスペシャルな事業ですよ。あるいは、市内にある慶應大学だとか、こういったところとのコラボレーションというのが、この2年ぐらいでもすごく生まれてきているし、来年もかなり期待されているところもあります。そういった秀でているところと学べるチャンスやアクセスするチャンスを、いろいろな形で機会を増やしていけばいいなと思いますし、それについては教育委員会と市長部局、まさにここが連携していかななくてはならないところだと思いますので、岩切委員のおっしゃる御趣旨というのを、これからの4年間にどれだけチャンスをつくれるかなということに、私どものほうとしてもしっかりやっていきたいと思っています。ありがとうございます。

いかがでしょうか。岡田委員、お願いします。

岡田委員 先日、ニュース映像に市長が出ていらっしゃいまして、羽田と川崎を結ぶ橋でインタビューを受けていらしたのですが、このかわさき教育プランを通して私が、第一に思ったのは、あのキングスカイプロ

ントで働く人の3分の1は川崎の義務教育を受けた方々であってほしいなという思いで、その基になるのがこのかわさき教育プランだと思います。

御案内のように現場の学校のことに責任を取るのは私たち教育委員会しかありませんので、その意味でもよく練られているプランでありまして、だからこそ、これが具現化されて着実に成果が生み出されるように、教育委員会と現場と、それから保護者の方々、子どもたちと保護者の方々、それから市民が一体になっていけるように、例えば現場の先生方がふっと教育委員会を見たら誰も旗を振っていなかったら元気がなくなってしまうので、この計画がさらに前進していくように旗を振り続けていていただきたいし、今までもそうしていってほしいわけですが、さらに旗を振り続けていってほしいなと思います。言葉が変ですが、本陣の旗頭がしっかりたなびいていると、やはり元気が出ますので、その旗を振り続ける工夫をさらに進めていってほしいと思います。

それと、かわさき教育プラン10年目の第3期に当たりますが、実はこの第3期のところで私たちはコロナ禍というような体験をしたわけでありまして。これも御案内のとおりだと思いますが、ダボス会議を主催したクラウス・シュワブがこのコロナを体験した私たちはグレートリセットを迎えている、グレートリセットだと言っているわけでありまして。つまり、このかわさき教育プランが旗を振りながら絶えずリサーチをして、目標、それからビジョンとプラン、そして実施して、そこにチェックをして、それからさらにアクションを起こしていくというRGPDC Aサイクルといいますか、それを絶えず繰り返していくことによって、定期的にそれを繰り返していくことによって、先ほど言ったクラウス・シュワブが言うグレートリセットにぜひつなげてほしいと思っています。

他の教育委員会の方と話す機会があるのですが、川崎はすごいねという声をいつも聞くんです。GIGAスクールのときも申し上げたように、教員向けマニュアルの冊子をいち早く作って全員に配ることのできる、これはすごいと言われていて、一体となって、ぜひ進めていきたいなと思っています。私の立場で言うのも変ですが、私の決意表明みたいになって変ですけど、ともにそれが決意表明というか、一緒にやっていきたいなという、そんな思いです。

福田市長 ありがとうございます。

岡田委員が本陣の旗を物すごい勢いで振っていただいているということに、非常に心強く思っております。ありがとうございます。

よろしいですか。

小田嶋教育長 各委員から、それぞれの専門性ですとか、経験の中から特に期待される、期待していただいている部分を述べていただいて、私としては皆さんの期待をしっかりと受け止めてリーダーシップを発揮していかないといけないと、改めて今思ったところです。

私のほうでは、この4年間というと、2025年度までの計画になるわけですが、今、新学習指導要領が小中と始まって、来年度から高校が年次進行で進んでいく、そういう時期ではあるのですが、もうこの2025年度の次の年ぐらい、あるいは2025年度から恐らく次の学習指導要領の論点整理が始まっていく、もう改定作業が進んでいくという時期とも重なっていきます。

現行の指導要領が2030年を見越したものでしたけれども、その次の10年を見越していくということが、もうすぐに始まろうとしているぐらい大きな変化の中にあるということで、その変化に対応していくための教育ということでは、本当に10年前、20年前の考え方からは大きく変えていかないと、学校現場も我々もそうですし、意識改革が今まで以上に求められると思っています。

そういった意味で、皆さんの期待に応えていく部分でも、本当に今までの学校の見方、学校とはどういうものかという学校観ですとか、子ども観、授業観、あるいは児童生徒指導観なんて言ってもいいかもしれま

せんが、そういったものを大きく見直していく意識改革をより具体的にやっていく4年にしていかないといけないなと思っています。

私、念頭の校長先生方に向けた挨拶、オンラインでしたけど、また、私の再任に際しての所信表明でも述べさせていただきましたが、重点的に三つのことを強調していますが、一つは授業改革、これはこの基本政策のⅡと関係するところで、やはりGIGA端末をツールとしてしっかり活用しながら、今までの授業の形にとらわれずに、あるいは教師の役割にとらわれずに新しいスタイルを求めていくということが一つあると思います。

もう一つ、二つ目が支援教育の充実ということで、これは基本政策のⅢに関わって、組織的にも来年度から新たに支援教育課という形で課をつくりますので、その課を中心に一人ひとりのニーズに応じた教育をしっかり進めていきたいと思っています。

あと、三つ目として、これは基本政策Ⅶと関わっていきますが、学校と地域との関係性の強化、人づくり、つながりづくり、地域づくりということで、先ほど田中委員からもお話があった部分ですが、この部分についても地域教育推進課という新しい課をつくって取組を強化していきたいと思っています。

どの取組を進めていくのも、結局教育は人なりという言葉にあるように、そこに関わる人、学校教育においてはとにかく、やはり教員ということで、その人材確保、育成というのが、今、本当に大きな課題になっている中で、川崎の若い教員、あるいはこれから教員を志す人が、自分が教員として目指すべき姿ですとか、方向性というものが具体的にイメージできるような校内でのOJTですとか、教育委員会としての研修体制とか、また自己研さんもしていただかなくてはいけないのですが、そういった中で、それぞれがやはり教育は自分の原体験というか、自分が受けてきたい意味での教育、あるいは悪い意味での教育でこうありたいとか、こうあってはいけないというのは、誰でも持っていると思いますが、それもやはり10年以上前の教育の姿ということになると、その若い先生たちも意識改革をしていながら、新しい教師像、学校像を求めていかないと、そういう視点をしっかり持って人材育成、人材確保に努めていきたいと思っています。

以上でございます。

福田市長 ありがとうございます。

先週の市議会で、小田嶋教育長、再任という議会同意も得ましたので、所信表明でも力強く、今言われていたような話をされていて、全会一致で再任同意を受けるというのは、それに期待されていることでもありますので、ぜひ実行していただきたいと思えますし、所信表明の中で小田嶋教育長が教育、教師像として、教えるということから、ティーチというところからファシリテートしていくということも大事なことで、そういった人材育成をしていかななくてはいけないということを言われていたのが、私は非常に印象的で、ぜひ、GIGAスクールの中でどのように授業をファシリテートしていく能力というのは、必要な要素だと思いますので、ぜひそちらのほうにも期待したいと思っています。

御意見、それぞれありがとうございました。

それでは、本計画をもって、今後4年間の本市の教育大綱とするということで、よろしいでしょうか。

(異議なし)

福田市長 ありがとうございます。

では、そのように決定したいと思います。

議題1については、以上といたします。

続いて、議題の2、学力向上に向けた取組に移ります。

学力向上に向けましても、私も就任以来、全ての子どもに分かる実感を大切にして、教育委員会事務局と

連携しながら力を注いできた取組になります。

この間、GIGAスクール構想の進展など、学校や子どもたちを取り巻く教育環境は劇的に変化しておりますので、改めて大切にするべき視点や今後の可能性など、皆様と議論してまいりたいと存じます。

それでは、事務局から説明をお願いいたします。

二瓶教育政策室担当課長 続きまして、資料2、基本政策IIの学ぶ意欲を育て、「生きる力」を伸ばす、学力向上に向けた取組について、御説明をいたします。

2ページを御覧ください。初めに、本日の意見交換に当たりまして、学力観というものが様々でありますことから、本日は学習指導要領にある「生きる力」の三つの要素のうち、「確かな学力(知)」について、子どもたちの「分かる」を大切にするに絞らせていただきたいと思います。確かな学力は、知識や技術、思考力・判断力・表現力をバランスよく育み、主体的に学習に取り組む態度を養うものとされております。

3ページを御覧ください。確かな学力に関連いたしまして、教育プランに設定をいたしました指標を御紹介いたします。授業の理解度、授業の好感度、授業の有用度につきましては、第1期実施計画開始の平成26年度から改善しているものもありますが、今後の取組を通じて改善していく必要があると考えているところでございます。

4ページを御覧ください。これまでの取組でございますが、「確かな学力」育成に結びつく主な取組は、教師による丁寧な指導、習熟の程度に応じた指導、少人数指導や少人数学級などでございます。

また、市学習状況調査につきましては、第3期実施計画で拡充していくものでございます。

5ページを御覧ください。これまでの取組といたしまして、これまでも教師の力量や経験に頼った形で生活態度や授業の様子、テストの結果などの情報が活用されておりました。令和元年度、文部科学省におきまして、GIGAスクール構想が打ち出され、これらの情報を含めて「スタディ・ログ」と呼ばれております。

従来の活用におきましては、データの蓄積がされていない、そのため客観的な根拠として、学年や学校単位などでの集団や経年の比較等に基づいた授業改善や市の教育施策の立案には生かされづらかったところでございます。

6ページを御覧ください。「確かな学力」につながる環境整備の進展といたしまして、かわさきGIGAスクール構想による1人1台端末が実現したことで、様々なスタディ・ログの蓄積が可能となっております。改めまして、スタディ・ログのイメージといたしましては、児童生徒の授業中の意見、また授業中の作成物から各種テストの結果などがあり、蓄積することによりまして、個人や学級単位で客観的な根拠に基づいた活用が期待されるところでございます。

さらに、学校単位、市単位の活用もしやすくなるものと考えているところでございます。

7ページを御覧ください。活用の主体ごとのイメージでございます。個人でありますと、自身の学習に生かすことが期待されるところでございます。学級単位であれば担任による指導や評価の改善、学校単位では管理職などによる学校全体の運営や校内体制づくりに活かされることが期待されます。また、市単位では、市の教育政策の効果検証に活かすことが期待されます。

8ページを御覧ください。さらなる充実に向けまして、市学習状況調査の拡充でございます。1人1台端末から得られるスタディ・ログの活用を進めるとともに、学習状況調査については、小学校5年生、中学校2年生を対象に実施しているところですが、令和5年度には小学校4年生から中学校3年生までの6学年に拡充してまいります。また、調査内容や手法につきましても、令和4年度にモデル実施を行いながら見直しをしてまいります。

9ページを御覧ください。こちらはさらなる充実に向けて子どもたちの「わかる」につながる流れのイメージでございます。これまでも教員による授業やテストなどを基にした「わかる」につながる指導は実践されておりますが、この流れにより充実させる手がかりといたしまして、学習状況調査が大きな役割を果たす

ものと考えております。

10ページを御覧ください。新しい学習状況調査のイメージ図でございます。これまで市学習状況調査は、本市の教員及び総合教育センターが主体的に作問、分析を行ってまいりました。新しい学習状況調査では、負担軽減も考慮し、民間ノウハウを活用しながら学習到達度調査と学習意識調査を実施、また分析システムによる個人単位の分析や集団単位の分析を行ってまいりたいと考えております。分析結果を児童生徒本人や教員にフィードバックすることで、個別最適な学びに活用してまいります。また、学校現場のみならず、市の教育施策立案に活用することも検討してまいります。

11ページを御覧ください。補足といたしまして、個別最適な学びと並びまして進めていかななくてはならない協働的な学びについてでございます。今後、かわさきGIGAスクール構想のステップアップにより、協働的な学びが変わってまいります。既に資料のような授業の実践事例もございまして、思考力、判断力、表現力の向上に向けた取組も充実していけるよう取り組んでまいります。

以上が本市における学力向上に向けた取組の説明でございますが、国における動向も御紹介させていただければと存じます。

12ページを御覧ください。こちらは、令和3年1月の中央教育審議会（答申）の抜粋でございます。2020年代を通じて実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿について、教師の視点といたしまして指導の個別化、子どもの視点といたしまして学習の個性化といった観点が示されております。

13ページを御覧ください。同じく答申の抜粋でございますが、「令和の日本型教育」の構築に向けた今後の方向性といたしまして、義務教育段階での履修主義と習得主義の考え方を適切に組み合わせ、「個別最適な学び」及び「協働的な学び」の関係も踏まえつつ、それぞれの長所を取り入れることが示されております。国の動向についての紹介は以上となりますが、併せて御確認いただければと存じます。

事務局からの説明は以上でございます。

福田市長 ありがとうございます。

ただいま、事務局から説明がありましたけれども、GIGA端末が導入され、教育データを活用した個別最適な学びの充実に向けて大きな可能性が広がっているわけですが、まずは、今、説明がありましたデータを活用した教育の充実という来年度からの新しい取組に関して御意見をいただければと思います。

どなたからでも結構です。

高橋委員、お願いします。

高橋委員 来年度から、まずは初めのステップとして試行で学習状況調査が業者委託されたりですとか、民間のものを活用したり、実施学年が拡大されていくということで、いわゆるデータが取りやすいもの、つまり数値なので、テストの点ということになると思いますが、世の中の的にもスタディ・ログとか、その学習データというと、その狭い意味の、いわゆるテストの点数、できているかできていないかというところがまだ議論になりがちなのかなと思っていて、特に公立の学校が大事にしているというか、今までやってきたところは、点数だけで計れないところをどうやって評価したり、どうやって子どもたちにフィードバックしていくかというところを、充実してやっていると思っている。それは親としてもそのように思っています。

ただ、点数化は簡単に扱いやすい部分ではあるので、先生方の負担などを減らしながら、資料にも出ていましたけど、何となくこうなんじゃないかというところを裏づけるために使うところはあると思いますが、あまり点数主義みたいなにならないようにどうやって持っていくかという視点は、常に大事にしていけないのかなと思います。

特に、学習履歴ははっきり言ってしまうと、いわゆる塾というところでは、もう何年も前からやられていることなので、点数の分析みたいなものは、もうあるものを使っただいて、じゃあ、学校でしか取れな

いもの、学校でやっていっているものをどうやるかという次のステップを見据えながら、まず最初の一步をやっていくところが非常に大事になってくるのかなと思います。

そういう意味で、この資料の6ページのところに、スタディ・ログのイメージでいろいろな段階のデータがあると思うのですが、例えば、この上から三つ、児童生徒の授業中の意見とか、授業中の作成物、「Google classroom」での課題・提出物、もうこれらは、GIGA端末でそれぞれクラウドにためることはできるような仕組みはあると伺っているのですが、データはただ、ためるだけではうまく活用できないので、じゃあ、これからこういう簡単に扱えない、数値化ではない、単純ではないデータをどうやったらうまく整理しながらためて活用できるようにしていくかという、そういう、データリテラシーみたいなものが、先生にも求められるし、子どもが自分でためていくという仕組みになっていくと思うので、子どもにも求められていくのかなと思います。

ただ、こういう仕組みは、仕事をしていくとか、将来大人になったときに非常に重要な能力になってくると思うので、子どものうちから自分でやっていけるということは、非常にキャリアというか、キャリア教育みたいなものにもつながっていくのかなと思います。

最後にもう一点、学習状況調査もそうですけれども、出たデータ、結果をどうやって子どもたちにフィードバックしていくかということも、すごく関心があって、今の学習状況調査も子どもと親に返ってくる個票が、どんどん充実していくけれども、その紙をもらっただけではなかなか家で一緒に勉強したりとか、子どもがそれをうまく活用できるような環境が整っていないところがあるので、親も頑張るけど、例えば長期休みの宿題が今は同じものが出ているのを、スタディ・ログに従って、個別最適な課題にするとか、毎日の宿題もそれぞれの子どもにとって必要なものにしていくことなどがこれから考えられるのかなと思います。

それから、授業の中でフォローできない部分を、授業以外でどうやってフォローしていくかというところで、大分先の話にはなりますけれども、例えば寺子屋とか、そういうところでどうやってそれを生かしていくとか、いろいろな広がりは考えられると思うので、先のステップを見越しながら来年度から、まずは始めていただければと思っています。

福田市長 ありがとうございます。

私もそのような、例えば個別的な宿題の出し方とか、ドリルみたいな話というのを、うまく分析して活用されていけばいいなと思っていますが、本当に広がり可能性のあるものだと思います。先を見据え、活用を見据えてという視点は、御指摘は非常にごもっともだなと共感させていただきました。ありがとうございます。

いかがでしょうか。

岡田委員、お願いします。

岡田委員 学力向上に向けた方向性と課題という視点に立ったとき、データ活用をどうするかを考えるが、デジタルトランスフォーメーションは手段でしかありませんので、このデータをどう使うかということを目的化しないことだと思います。

イギリスのバビロンヘルスというAIを使った診断ですね。この結果、イギリスでは医師の診断精度が改善したわけでありますので、それと同じように、川崎の先生方の指導力がいかに向上するかという視点が必要で、個別最適化のためのデータ活用というのも、いつも明確にされていて、そのためのデータベース化なのだと思います。

市長がおっしゃったように、個別最適化して誰一人取り残さないためのものであらねばならないと思います。そのとき、私が現場でやっていたら、やっぱりスーパーバイザーが欲しいと思うんですね。自分の足りないところとか、見えていないところを教えてくれるような、スキルをちゃんと教えてくれるようなスーパ

ーバイザー、それから、データ活用していくために具体的に自分のクラスとか、自分の授業とか、この児童・生徒さんのためにどうするかというようなスーパービジョンが示せるようなものも工夫していったらいいなと思います。

もちろん、それを考えて教育委員会としては組織を変えて、それに対応しようとされていますので、それがさらに具現化されることを願ってやまないところです。

もうちょっと別の視点で、大きな視点でいくと、精神はシステムに作用されて、思考は言語に規定されるとよく言われていますように、システムが変わっていくと必ず教員のやる気などに影響するはずですので、データ活用のシステムが川崎の教員のやる気を前進させるものであってほしいなと思います。

これ、一般論として言われているのですが、これからAIも使われていくと思いますが、AIは人間の多様性ととも生きていきますので、多様性の中にこそAIを活用するヒントがあるのではないかなと思っていて、そういった意味では川崎の教育は他の教育委員会以上に、多様性を本当に含んでこれまでの伝統の中で培われてきたので、これが生きるときが来ているんだなと、そういう思いでいます。

だから、川崎の持っているこれまでの川崎の教育のよさとか、川崎の地域が持っているよさというか、あるいは多様性というか、そういったものを生かしていけるデータ活用であってほしいなと願っております。

福田市長 ありがとうございます。

いかがでしょうか。

田中委員、お願いします。

田中委員 このスタディ・ログですけれども、個別最適な学び等スタディ・ログという、この関係を見たとき、思いつく言葉が自己調整学習という言葉なんですね。自己調整学習というのは、自ら調整しながら学習を進めるということですけど、ざっというと、子ども自身が自分自身の学習目標を自分で定め、自分自身の欠点とか、長所をきちんと認識しながら、それをうまく自分の中で振り返りながら学習を進めて成果を上げていく、そういう自己調整学習という概念がありますが、まさにスタディ・ログというものは、自己調整学習のための非常に重要な資源になるわけですよ。

ですから、7ページに個人、学級、学校、市と、この活用主体がありますが、最も基本的な活用主体は個人だと思うんです、子ども自身。だから、スタディ・ログのオーナーは、まず子どもだという考え方が大事ではないかなと思います。

そのもとで家族がサポートしながら子どもの自己調整学習がうまくいくように、家族と子どもも協力しながら進めるとか、さらには先生がサポートしながら子どもの自己調整学習をサポートしていく。さらには、友だち同士となると、それぞれの子どもの自分で自己調整学習をやるので、それが交流するということは、言わば対話型、交流型の自己調整学習ということになってきて、そこで先ほど教育長のお話にもありました、教師が教える立場からファシリテートする立場へという、まさにファシリテーターとしての教師の力量がこの辺りで非常に要求されてくるということではないかなと思います。

そういうことがうまくいくと、よく言われる主体的、対話的で深い学びというものが効果を上げてくるのではないかと考えています。

ですから、このスタディ・ログはまず子ども自身のためにあって、子どもがそれを使いながら自己調整学習を進める、それが友だち同士でも交流しながら教師がコーディネートして、ファシリテートして深い学びにつなげるというような形でスタディ・ログが活用されていくといいなと考えております。

以上です。

福田市長 ありがとうございます。

石井委員、お願いします。

石井委員 ありがとうございます。スタディ・ログの活用、あるいは蓄積についてですけれども、今、GIGAスクール構想というの、緒についたばかりの段階でありまして、先生方も、それから生徒も使い勝手としては全てがある程度のレベルまでもう既に達しているかというところで見ると、まだまだ疑問な点、得意な人、不得意な人、日常的に親しめる人、そうでない人、いろいろいると思うんですね。

今日、午前中の教育委員会会議での学習状況調査の報告がありましたが、GIGA端末の利用について、大体、中学生の場合ですと、50%強ぐらいはよく使う、あるいは進んで使っているという状況であります。

先生の中にも、ICTリテラシーというのは、いろいろ差があると思いますので、今、GIGAスクール構想で研修であるとか、いろいろなアドバイスであるとか、あるいはスーパーバイザーとか、そういった形で先生方の力量もファシリテートできる段階に、向かっているところだと思いますから、トライアル的な部分、試行錯誤する、失敗もする、また戻る、そういった進み方の段階だと思いますので、性急にある程度まで多くを求めるといってではなくて、着実にお互いに理解をしながら進めていくということが非常に大切になってくるのかなと思っていますし、何よりも子どもたちにしても、先生にしても使い勝手が習得できなくて、使わなくなってしまうとか、活用できなくなってしまうことはあってはならないことだと思いますので、そこは個人差も含めながら丁寧に進めていくことが大切になってくると思います。

以上です。

福田市長 ありがとうございます。

岩切委員、よろしいですか。

岩切委員 スタディ・ログの活用ですけれども、使用目的を明確にするということは、すごく大事ななと思っています。先ほど来、個々人の分からないを分かるにさせるための目的でやるのであれば、そういうスタディ・ログになると思いますし、個性を伸ばしていくという目的でやるとすれば、分かるをもっと分かる、あるいはもっと深く理解するということになっていくので、目的をはっきりするということは、とても大事なんじゃないかなということを思っています。

それから、こういったことが導入されますと、多分、学校の教室の中で教師への負担というのが少し大きくなっていくのかなということも、想像されますが、ここが教員の負担増ではなくて、仕事の効率化とか、あるいは見える化につながっていくような、そんなつなげ方ができるといいなということを思っています。

今、世の中ですごく言われているのは、生涯学習ということもあるんですけど、学びを終えた後でもリスキリングということをしごく言われています。子どもたちができることという、もしかしたら例えば小学校の卒業とか、中学の卒業という、そういうタイミングではなくて、個々人のあるタイミングでの小さなリスキリングということが出来る、そういうことが提供されていくのかなと思いました。

そういうことを思うと、私の経験上の話ですけれども、非常に自分自身で大きい変化があったなと思ったのは、中学のときの国語の授業でした。それは授業の最初と最後で自分がすごく大きく変わっている。それは、数値化できないものなので、定性的なものうまく記録させる、あるいは記憶させられるような、子ども自身が記録できるような、何かそんな仕組みを考えていただけるといいかなと思いました。

学校の様子を見ていますと、子どもたちは本当に簡単に写真を撮ったり、いろいろな映像情報を保存したりすることは、とても得意です。ですから、本人が記憶に残るようなものをいっぱい集めていくとか、自分の成長が可視化できるようなもの、そういったところにつなげていただけると、子どもたちの自己肯定感も高まり、夢を持った人生を描けるようになるのではないかなと、そんなことを思いました。

福田市長 ありがとうございます。

小田嶋教育長 皆さんのお話と重なる部分も少しあるのかもしれませんが、スタディ・ログといいますと、どうしてもデジタルのイメージが当然強いし、デジタルでお話しされていると思いますけど、学習情報に限らず子どもに関する情報という、今までも学校の中、教室の中にはたくさんの情報があふれていて、それをどのように処理して扱って、それを子どもたちに返していくことは、教員はみんなそれぞれやっていたわけですね。でも、それをうまくやるのは、本当に職人芸的な部分が大きかったです、実際問題として。

例えば、今、岩切委員がおっしゃったようなこととも重なりますが、今の学習指導要領だと主体的に学習に取り組む態度、評価の観点が三つある中で、知識・技能・思考、判断・表現、それともう一つが主体的に学習に取り組む態度。前の学習指導要領だと、関心・意欲・態度、それをどういうふうに評価していくのかということが、ずっと前から難しい課題だし妥当性はどうかという言われていました。

そういったときに、かつて、例えば挙手の回数とか、発言の度合いとか、ノートの取り方とか、そういうものも一つの目安にはなるけれども、それだけでは当然なくて、内面での心の動きだとか、自分の中に湧き起こっていた疑問だとか、関心がどう深まっていったり変化していったりとか、あるいは同じ1時間の授業の中でも、自分の中の問かけなどが深まったり、変わったりして、最後に少し分かったとか、そういった中での変化をどう捉えるのかというのが課題でもあったし、今でもやはり課題であります。

岩切委員がおっしゃったように、授業の最初と最後での自分の変化ということを見せるためには、どうしてもやはり言葉として表現することが必要で、その中で自己評価をどういうふうに有効に使っていくことが、今まで大事にしないといけない観点だったし、私もそういうことを大事にしていきました。

それを、例えば1時間の自己評価、少しのものでも、それを積み重ねていくことでその子の学びの姿というのが見えてくるんですね。

それを先ほど言ったように、一つのデータではあるのだけど、職人芸的にそれをやっていく、扱っていく部分もあったのを、今度はスタディ・ログとしてデジタル的なものとして、先ほどのスライドで言うと6ページにあるような、上の三つにあるようなものが蓄積されていきます。

それをどう扱っていくか、非常に膨大なデータになってくるので、教員の多忙化という問題とも重なってくるのですが、その中からどういうものを抽出して処理して扱っていくのか、これは個々の教員の技量によるところもすごく大きいと思いますが、それを試行錯誤しながら一つの標準形というか、有効な形を見いだしていけないといけないと思います。

まだまだ、これは本当に課題があるのですが、来年度、総合教育センターでも、そういったことを研究するデータ活用に関する研究会議を立ち上げることも聞いていますので、教育委員会としても、その辺をしっかりと整理していく必要があるのかなと思っています。

それで例えば、これも田中委員がさっきおっしゃった、7ページのスライドの個人、学級とある中で、そういった情報が個人に返ってくるの意味はすごく大きくて、自分自身を知ることでもあります、学級の中、集団の中に、今、ここには担任のことしか書いていませんが、学級の中でほかの子たちにもその情報がG I G A端末を通じて簡単に共有していけると、その中で他者の情報を取り入れたり、あるいは自分と比較したりする中で、自分との違いを知ったり、共通点を知ったりする中で、視野が広がったり、考えが広がったり、深まったりしていくと。そういったこともスタディ・ログの活用として、今までもやっているのだけど、それが非常に有効な形で効率的にできるという意味で、非常に大きなものになっていく。その有効活用については、本当にこれからしっかり活用していけないなと思います。

それともう一つ、川崎市の学習状況調査をこれからまた変えていくという中では、より点数に表れる形での、そういったスタディ・ログをどう活用していくのか。あと、生活意識調査も非常に重要になってくると思うので、それを今までは限られた学年だけでやっていたものを集団の変化ですとか、個人の変化もあるし、

学年全体としての変化を経年的に見ていくこともできる、非常に有効なものになっていくかなと思う。そういったものを総合的に、しっかりこれから研究しながらですけど、進めていかないといけないと思っています。

以上でございます。

福田市長 ありがとうございます。

皆さんも御懸念の部分があると思いますが、数字というのは使い方によって悪い使い方といい使い方とされることがあると思います。そういった意味では、皆様おっしゃっているように、何のための数字なのかという目的を明確化することというのは、全員がよく理解していないといけない。生徒も保護者も、それから教員も教育委員会もということで、やはり個別最適化、田中委員が言われたように、スタディ・ログとは本来的に誰のものなのかと言えば、子ども個人のものであり、それをどうやってうまく学校であり、教員であり、あるいは教育委員会で施策につなげて活用していくことだと思います。

決して、何となく学習状況調査を全校で各学年でやっていくというと、旧来型の言い方でいえば、何となく学校の序列でも出てしまう、そういう御懸念があるような感じも一般論としてあるのかもしれませんが、決してそうではないということをしっかりと説明していかなくてはいけない。それを全員が目的一致させていく必要があると思っています。

岩切委員のお話、非常に面白く聞かせていただきましたけど、定性的なものをどうやって可視化してうまくこういったGIGA端末などを使っていくことは、非常にチャレンジングでありますけれども、面白いなと、個人的に思いました。様々な活用法はあるなということをもっともっと勉強しなくてはいけないなと、個人的にも思わせていただきました。ありがとうございます。

それでは、ただいまはデータ活用についてのお話をいただきましたけれども、これからは学力向上に向けた取組全体という形でこれまでの取組を踏まえつつ課題認識ですとか、あるいは今後の方向性について、より幅広く御意見をいただければと思いますけれども、いかがでございましょうか。

田中委員、お願いします。

田中委員 ありがとうございます。

この資料の11ページに協働的な学びの事例とありますけれども、私は協働という協力の協と働くという字を書いた協働という言葉の意味にこだわりたいと思います。

というのは、もともと協働というのは、市民活動とか、NPO活動が活発になってきたときに、市民と市の協働というような言葉で随分使われていたと思います。川崎市の自治基本条例の中でも、やはり協働というのが一つのキーワードになっています。

ここでいう協働というのは、異なる立場とか、性格を持つもの同士が同じ目標を持ちながら対等な関係で役割分担をするとともに協力して成果を上げていくというような意味で、市民活動とか、市の政策の分野では使われていると思います。

それがさらにはマルチステークホルダーというような言葉の下に、多様な利害関係者がまさに協働しながら成果を上げるというような、マルチステークホルダー・プロセスという言葉でよく言われますけれども、そういうようなことで、政策分野では協働という言葉が使われてきたと思います。

ですから、学びの世界でも、この字を使った協働ということを使うからには、やはりその意味をきちんと継承していなければいけないのではないかと思います。

そう考えて、この11ページを見ると、ここではグループで協力しながらオンラインをうまく使いながら、ITの環境を使いながら考え方をまとめて、グループ同士で意見交換ということですけども、ただ、これだけであれば、もともと使っていた共に同じという言葉を使った共同学習とあまり変わらないと思います。

ですから、この協力しながら働くという言葉を使った協働的な学びということを推進するからには、校内であれば異なるクラス同士で何か情報交換しながら学んでいくとか、異なる学年同士で何かやっていくとか、特別支援学級と普通学級の間で交流しながらやるとか、やはり立場の違う者同士の交流ということが入ってなければいけないと思います。

さらに、学校の外で見れば、先ほど話題に出しました市民館でオンライン学習をどんどん進めていくと、市民主体の学習を進めるということになれば、そういう市民館の学習グループと子どもたちの間で、例えばSDGsの幾つかの目標について議論をしていくとか、先ほども話題になりました地元の企業との間で子どもたちと企業経営者との間で、意見交換し合いながら学び合っていくとか、さらには外国人とか、他地域、あるいは外国そのもの、他の国とか、そういう異なる立場同士での協力しながらの学び、そこにこそ協働という言葉を使いたいと思います。

ですから、GIGAスクール環境を用いながら、こういった意味での異なる立場同士での学び合いというものを特にこの言葉、協力しながら働くという言葉を使った協働的な学びとして推進していきたいと思っています。

以上です。

福田市長 ありがとうございます。

教育長、コメントありますか。

小田嶋教育長 今、田中委員のおっしゃったこと、全く同感で賛同するところですけど、さきほど言ったように子どもたちは授業を通して、いろいろな活動を通して、自分自身の考えをしっかりと持つことも大事ですが、クラスという集団の中で、自分と違う考えや感じ方をする子がいるということを日々、学校生活を通して感じていて、さきほど言ったように比較したり、同じだということに安心したり、その違いはどこにあるのかなと考えたりして、やはり視野を広げて考えを深めていく、そういう中で、多様性を認める力というのが養われていくと思います。それが非常に大事なので、それをさらに広げた大きな視野での、今、田中委員のおっしゃったことというのは段階を追ってですが、非常に重要な視点だと思います。

以上でございます。

福田市長 ありがとうございます。

それでは、ほかの方、いらっしゃいますか。

高橋委員、お願いします。

高橋委員 最初にあった、確かな学力とは何かというところを自分なりに考えてみたんですけども、最初に読んだとき、確かな学力とは何かきっちりした知識とか技能、例えば、漢字をしっかりと覚えているみたいな感じのかなと思いましたが、田中委員の自己調整学習のお話ですとか、石井委員のお話を聞いていて、何か堅いものではなくて、もっとしなやかな、その人に根づいた何があってもぶれないとか、なくならないとか、そういう意味での確かな学力ということなのかなと、お話を聞きながら思いました。

さっきの教育のデジタル化の話とも通じますが、デジタルのよさは失敗しても結構すぐに直せる。例えば、手書きの時代は何か書いたら何回も消すと紙とかノートがぐちゃぐちゃになって、それで嫌になってしまう。デジタルは、すぐ消して、すぐに新しいものが作れるリトライがすごく簡単なところが、私も活用していますし、子どもたちにとってもすぐくまく使ってもらえるところなのかなと、そうやって自己調整学習ではないですけど、いろいろなことを失敗しながらリトライして何か確かなものに近づいていくということが大事になってくるのかなと思っています。

ずっと感じていたことがありまして、少しずつG I G A端末の導入とかも関係あるかなと思いますが、私、子どもを学校に入れた当初、子どもにとって、すごく学校は緊張感のあるところだなと思いました。のびのびというよりは、何か間違えてはいけないとか、きっちり何か型みたいなものがあって、それをしっかりこなすというような雰囲気があって、それがすごく違和感を感じていたし、先生も子どもも少し萎縮しているのではないかと思うところがありましたが、こうやっていろいろ環境も変わってデジタルのものも入って、だんだんいろいろなことをやっていっていいんだ、自由に意見も言っているんだという雰囲気になっていくような気がしていて、午前中の教育委員会会議の学習状況調査の報告でも、自分の意見を発言しようとしていますかというところの数値がすごく伸びていて、だから、あと、いろいろなところの研究報告会に行ったときにも、子どもたちがのびのび発言しているような、のびのび活動しているところを何度も拝見しているので、そういうところが確かな学力を育てていく土壌とか、環境になるのではないかなと思っていて、それなので、どんどんよくなっていると思いますが、さらに失敗してもいいよ、学校は失敗するところだ、教室は間違えるところだという有名な絵本もありますが、もう一度、そこに立ち返って、いっぱい失敗して、いっぱいトライして自己調整して、どんどん自分の中に確かな経験をして育てていこうというところに立ち返りながら、いろいろなところを技術とか使いながらやっていければいいなと改めて思ったところです。

福田市長 すてきな御意見、ありがとうございます。

石井委員、お願いします。

石井委員 国際協力の視点から、意見を述べさせていただきます。昨年末に、橘高校の国際科の開発途上国の課題をテーマとした探求学習に参加をさせていただきました。

ブラジルでの国際協力に従事した専門家として、研究に取り組んでいる生徒と意見交換をしました。意見交換を通じて、生徒からは研究内容をより現実的な課題として実感し、課題解決に向けた探求への意欲が深まったとの感想もいただきました。

そして、1月には全部で10グループありましたが、それぞれの研究発表プレゼンテーションにもG I G A端末を活用して参加をさせていただきました。生徒はそれぞれ世界の国々から環境問題や教育、治安などをテーマに課題を抽出して、それぞれの解決方法について研究結果を英語でプレゼンテーションしました。

高校1年生なりに、非常に真摯に途上国の課題に向かい合っていて、よりよい世界を実現したいと、そういう意欲があふれているのを感じました。また、英語での発表でしたので、事前準備も非常に大変だったと思いますが、語学力の向上にもとても役立つのではないかなと思いました。

このように、国際理解を深めるということも学力の向上、あるいは意欲の向上にもつながることだと思いますので、今後の方向性の一つとして、考えていただくことも必要かなと思います。

福田市長 ほかに。

岩切委員、お願いします。

岩切委員 小学校のG I G A端末を使ったクラスを拝見させていただいたときに、感動したことがありました。それは何かというと、今までであれば、先生が意見はありますかと言ったらば、数人が手を挙げるといったような状況だったにもかかわらず、ジャムボードに書き入れてくださいと言った途端に、みんなが一斉に書き込んだというのが感動した光景でした。

それを考えると、自分の意見を持てる、それから自分の意見を言えるようになったというのが、このG I G A端末が大きく貢献しているなと感じました。意見を持って自分のことを表現できるようになると、今度、

違う人の意見も聞けるようになり、先ほどの協働につながってくるような気がいたします。

それから、企業のほうで協働ということをどのように捉えているかということ、昨今、協創、協力して創るという創造の創ですね、協創ということをごくいろいろな企業がやっているという中を考えますと、やはり違う分野の人、違う視点を持つ人、異なる意見を持つ人ということがとても大事だということをみんな理解し始めているわけです。（※一般的に言われているのは正しくは「共創」で協力の協ではなく、「共」でした。お詫びして訂正いたします。）

そういった意味で、自分と違っていてもいいんだということ子どもたちが理解するということがとても大事だなということと、それから違っているのは、なぜどこが違っているのか、表現的などころが違うのか、根本的に全く考え方が違うのか、何かそういうことを考える、いいきっかけになるのだろうなと思いました。

そうすると、どこが違って、どこが折り合えるのかと子どもたちが考えるという、何かすごくいい方向に進むヒントがそこら辺にあるような、そんな気がしました。

先ほど、高橋委員が確かな学力とはどういうものだろうという話がありましたが、私もこの学力というものは何だろうということと、それから、それを学力向上に向けたと言っていましたが、これは何か基礎力であったり、考える力であったり、他人を受け入れられる受容性だったり、度量の大きさだったり、何かそんなところにつながっていくのかなと思いました。

福田市長 岡田委員、お願いします。

岡田委員 今まで議論されていたところとは視点を変えて、学習環境という視点で発言しますが、2019年に国立教育政策研究所がアクティブ・ラーニングの視点に立った学習空間に関する調査研究というのを発表しています。

それから、OECDも、効果的な学習環境に関する各国専門家会合の取組というものを発表していますが、確かな学力を作っていくときに、今ある学校の教室の在り方をどういうふうに工夫していくか、国立教育政策研究所が言っていますが、グループ学習では普通の教室に5、6人入ったというような意識でやらないとうまくいかないという報告があります。

そうすると、従来の教室の中でグループ活動するのではなくて、もうちょっと広い空間か、何か考えていくと。そのとき、教科型教室というのを作るのがいいのではないかという意見も出ていました。従来のように、教室で全部教えるのではなくて、国語はこのこういうところを使うとか、数学はこのこういうところを使うという、学習環境のほうから見ていくというやり方であります。

現行の現場を考えると、そういう広いスペースを持っている、例えば理科教室をどういうふうに使えるかというのがすごく大事なのかなと思います。そういう視点を私たちも持っていないといけないかなと思いました。

先行する例として、岐阜市型のアクティブ・ラーニング空間アゴラというような報告もありますので、参考にしながらやっていくのも手かなと思います。もちろん、ここで言われた、誰もが主役となれるホワイトボードとがあって、教室の中にホワイトボードがグループごとに置かれて、そこで発表ができるなど、そういうことも実際行われているのではないかなと思いますし、岐阜市型のアクティブ・ラーニングの空間アゴラでもう一つ言われたのが、発達の特徴を踏まえた環境づくりということで多様性を考えたとき、いろいろな発達を考える必要があると示されています。

それに関連して、実は学習指導要領の中に新しく入れた視点があって、それが発達の視点です。発達の視点といったときに、小学校の学習指導要領の解説の総則編の第3章の第4節に示されていますが、児童の発達の支援ということで、学級経営、児童の発達の支援、ここでガイダンスとカウンセリングということを初めて言われました。

そうすると、ガイダンスという考え方と、カウンセリングという考え方を学級経営の中に入れていく。それから、生徒指導の充実の中では、よりよい人間関係の形成ということが言われています。それから、キャリア教育の充実ということで、各局が特質に応じてキャリア教育の充実をしていくことが小学校の学習指導要領の解説、もちろん小学校で言われているということは中学でも同じことが言われていますので、そこを踏まえたときに、本市ではキャリア教育は先進的にやっているのです、こういう特性を生かして学力をさらに高めていくときにどうするか。

先ほど、岩切委員や高橋委員がおっしゃっていましたが、川崎では学力というのは、さらに下位尺度としてというか、下位定義としてどういうふうに捉えていくのかというのを示していくのも一つの方法かなと思います。

それで、教育長のお言葉に戻りますが、学力を上げていくためには、川崎の先生方の指導力が上がらなければ学力は上がらないと思っています。

そのとき、現行の学習指導要領の中で求められているものとして、教育長もおっしゃったように、教師がリーダーシップを取っていただけでは駄目で、ファシリテートできる、促進者になり得る、両方ができなくては駄目だというように思います。このとき、大事なのが、コミュニケーション力だと思います。

国家公務員のためのマネジメントテキストが内閣の人事局から発表されて、見ましたが、あの中で示されていたのはコーチングです。現場の先生方もマネジメントとして、コーチングの力が絶対必要で、コーチングは今あったようなファシリテートするものですから、リーダーシップよりもファシリテートしていくためにどうするかということになると思います。

さらに言うならば、川崎市は共生教育プログラムを既にやっていて、コミュニケーションの在り方などが既に培われているはずですから、それとうまくリンクしていくことがとても大切で、コミュニケーションというのは相手を想像することで成り立つわけですから、相手のことを想像できる児童・生徒が培われていなかったら駄目だと思います。

同じように、協働するというのは、教師も協働しなかったら協働がうまくいくはずがないので、教師も協働して教育活動ができるようなことをどのように意識していくのか。

元に戻りますが、私は川崎の持っている多様性が必ずやこれにいろいろな力を与えてくれる、川崎のこれまでの培ってきたものがそこに実を結ぶに違いないと、何か変な確信を持っているので、ぜひこれを進めていきたいなといいますか、進めていっていただきたいなという思いでいっぱいあります。

以上です。

福田市長 ありがとうございます。

小田嶋教育長 スタディ・ログ、あるいはどんなにデータを使って個々の学びの姿が見える化して、そして例えば、AIを使ってお勧め問題ドリルが出てきたりとか、アドバイスが出てきたり、そういう形に今後、本当に変化していくとは思いますが、ただ、一人ひとり子どもたちのやる気ですとか、机に向かおうとする姿勢とか、そういったスイッチを入れていくのは、やはり日頃の学校や家庭での指導や支援の積み重ねだと思います。

そういった意味で、先ほど言いました、新学習指導要領の評価の観点の一つ、主体的に学習に取り組む態度、その土台となっていくのは、今、岡田委員もおっしゃったように、まさにキャリア在り方生き方教育で、何のために学ぶのか、日々の自分の学校生活や学習がどうやって自分の未来だとか社会と結びついていくのか、それを自覚しながら、自分の可能性というものを実感できるような、そういった支援をしながらやる気を起こしていくという、そういう部分というのが本当に大前提としてとても大事なので、川崎のキャリア在り方生き方教育、教育プランの基本政策の最初に掲げている一丁目一番地ですけど、今までの成果もありま

すが、今後さらにそこを進めていく必要があるということです。

あと、これも先ほど岡田委員もおっしゃったことですが、先ほどのデータの活用ですが、いろいろなことがこれから行われますが、その上でも、まさに教員の指導力や授業構想力など、いくらツールとしてのデジタルを使っても、もともとの指導力や授業構想力がなければいけないし、あと、先ほど評価のことがあったときに、評価とはどういう意味があって、どうなのかという評価の本当に基本的なことを教員がまずしっかり知っておく必要がありますし、そういったことを含めて私も最初に言いましたように、人材育成、若い先生だけではなくて、教員の資質向上をしっかり図っていくことというのがベースになっていくのかなと、そのように考えているところです。

以上でございます。

福田市長 ありがとうございます。

それぞれの委員の皆様からの何となく共通しているキーワードというのは、協働の学びというところで、違う異なる意見ですとか、違う学年ですとか、あるいは石井委員からあった、外国との取組ですとかと、様々な異なるところ、いわゆる多様性を協働的な学びの中で実践に移していくことこそが学力向上になるんだということを言われていたのではないかなと思いました。

とても大切な御指摘だったと思いますし、また、最後、岡田委員から人材育成の話もありましたけれども、ゆえに先生たちの忙し過ぎる状況を働き方改革をしっかりと行って、週末は自由な時間や、あるいはそういった時間に自らが学べるような環境を早くつくっていくという意味での教育長のリーダーシップにも期待したいと思いますし、ぜひ今日の学力向上のデータ活用の話もそうですし、それ以外のところも大変いい御意見をいただいたと思っています。本当にありがとうございました。

それでは、そろそろ時間になりましたので、本日は、次期教育大綱を決定し、今後4年間の本市の教育施策について、特に学力向上に視点を当てながら、活発な御意見をいただくことができました。

本日の協議内容を踏まえながら、今後の取組を進めていただきたいというふうに思っていますので、どうぞ引き続きよろしくお願ひしたいと思います。

協議調整事項は、これで以上となりますが、高橋委員が今期で任期満了ということになります。高橋委員におかれましては、保護者委員として本当によく現場に足を運んでいただいて、それから教育委員会事務局との意見交換を活発にさせていただいて、本当に驚くほどの勉強熱心さと、行動力で任期中、努めていただいたことに心からの敬意と感謝を申し上げたいと思います。

本当にありがとうございました。

それぞれいただいた御意見は、今回の教育プランの中にもしっかりと盛り込まれていると思いますし、足りないところは、また違う立場で御指導いただければと思っています。

高橋委員から、何か一言、御発言いただければと思いますが。

高橋委員 私が最終的に教育委員になったもともとのきっかけは、川崎教育プランにほれ込んだことにありました。夢や希望をいただいて生きがいのある人生を送るための礎を築くという、この基本理念もすばらしいと思いましたし、人がいるから川崎市がいるという、人を大事にするというところが、すごくしっかり出ている、この理念にすごく共鳴して、結果ここの椅子に座っていたと。

教育委員になって教育委員会や先生方のお仕事ぶりを見て、本当によくやっていると、子どもたち、また生涯学習などいろいろなことで一生懸命やっただいていて、本当に応援している気持ちでいつも座っていて、これからも川崎の教育の応援団として、いろいろなところでやっていきたいと思っていますので、そして4年間、こういう機会をいただいて、逆に私が感謝の言葉を述べたいと、ありがとうございましたという感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

福田市長 どうもありがとうございました。

それでは、協議・調整事項は全て終了ということで、よろしくお願ひします。

事務局に司会を戻します。

宮崎総務企画局都市政策部長 ありがとうございました。

それでは、これもちまして、令和3年度第2回川崎市総合教育会議を閉会いたします。

ありがとうございました。

16時30分 閉会